

③ 授業を実際のコミュニケーションの場とするために

理論編

1 英語で授業を行うことのねらい

高等学校学習指導要領(平成30年告示)では、授業を英語で行う目的を以下のように示しています。

生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。

つまり、授業を英語で行うことのねらいは以下の二つです。

- ① 生徒が英語に触れる機会を充実する
- ② 授業を実際のコミュニケーションの場面とする

生徒は授業外で英語に触れることが少ないため、授業で英語に触れる機会を増やすことが欠かせません。生徒同士または生徒と教師が英語でやり取りする場面をできるだけ多く設定しましょう。教師が英語を使用する際は、生徒の実態に配慮しながら理解可能な英語を使用しましょう。教師が意欲的に英語を使ってコミュニケーションする姿は、生徒にとってのロールモデルとなります。

2 外国語科の目標を理解しよう

高等学校学習指導要領(平成30年告示)で外国語科の目標を確認してみましょう。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(以下略)

外国語科の目標は、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することだと分かります。

高等学校学習指導要領解説では、コミュニケーション能力という言葉について、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)より引用し、三つの能力を紹介しています。

communicative competence (コミュニケーション能力)

- ① linguistic competence : 語彙・文法能力(語彙・文法などの知識と技能)
- ② sociolinguistic competence : 社会言語能力(社会的文脈などを考慮して言葉を使える力)
- ③ pragmatic competence : 語用論的言語能力(場面・状況・相手などを考慮して言葉を使える力)

コミュニケーション能力は、語彙や文法などだけではなく、文化や社会、コミュニケーションの目的や場面、状況への配慮からも構成されていることが分かります。このことは、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」でも共通しています。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

言語活動を行う際には、この見方・考え方を働かせる必要があります。情報や考えなどを的確に理解したり、適切に表現したり伝え合ったりするためには、言語そのものだけではなく、文化やコミュニケーションの場面等を考慮する必要があることが分かります。日頃の授業においても、目的・場面・状況を意識した言語活動を行い、授業が本物のコミュニケーションの場となるようにしていきましょう。

3 言語活動について確認しよう

言語活動とはどのような活動のことを言うのでしょうか。発音練習や音読などは英語を声に出していますが、言語活動と言えるのでしょうか。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（2017年 文部科学省）では、以下のように示されています。

言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。（中略）英語を用いず、日本語だけで情報を整理しながら考えなどを形成する活動は、外国語活動や外国語科においては言語活動とは言い難い。一方で、英語を用いているが、考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動も言語活動であるとは言い難い。例えば、発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、言語活動ではなく、練習である。練習は、言語活動を成立させるために重要であるが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある。

学習指導要領が示す外国語の目標は、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成であることから、コミュニケーションの要素には、以下の三つが含まれていることに留意しなければなりません。

- ① 理解する
- ② 表現する
- ③ 伝え合う

相手の伝えたいことをよりよく理解したり、自分の考えや気持ちをより伝わりやすく表現したりしようという姿勢を養いながら、双方向に情報が行き来する「伝え合う」言語活動を目指しましょう。

4 支援しながら言語活動を取り入れよう

高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、支援について以下のように説明しています。

高等学校では、外国語科で扱う内容が高度化・複雑化し、各科目ごとに目標とする水準が異なることを踏まえ、実際のコミュニケーションの過程で考えられる様々な配慮などを、目標において「支援」と総称することとした。これは実際のコミュニケーションを行う上で、例えば、①聞き手に合わせて話す速度や情報量が調整されたり（「聞くこと」）、②読み手に合わせて使用される語句や文や情報量が調整されたり（「読むこと」）、③話し手に、使用する語句や会話や発表の仕方などが与えられたり（「話すこと [やり取り] [発表]」）、⑤書き手に、書く際に有用な語彙や表現などが与えられたり（「書くこと」）するなどの前提条件があれば、それぞれの目標を達成することができることを示している。

教材研究などの授業準備を行う過程で、生徒が活動中につまずきそうな点に気が付くことがあります。このとき、私たちは三つのことを考える必要があります。

- ① 各科目の目標において示されている支援の程度はどれくらいか
- ② 課題の遂行に当たり生徒がどの程度自分の力で対処できるか
- ③ どのような配慮があれば課題を遂行できるか

このような配慮を学習指導要領では「支援」と総称しています。①について言えば、支援を行う程度は科目の段階とも関わっています。高等学校学習指導要領解説では、「『多くの支援を活用』する段階の初期においては、中学校における学習との接続に留意し、高等学校における学習に円滑に移行できるよう、言語活動において様々な配慮が必要」とされています。この「様々な配慮」の具体として、言語的な配慮（使用する語彙を易しい表現に置き換えたり、発信する上で有用な語彙を事前に示したりする）と運用上の配慮（生徒に与える情報量を調整したり、やり取りの仕方を活動前に見せたりする）があります。その一方で、配慮し過ぎることで、生徒が学習を深める上で有意なつまずきを取り除いてしまったり、コミュニケーションを行った後の振り返りが深まらなかったりすることも起こりかねません。生徒の学習段階や実態に基づいて、適切に支援を活用させることを心がけましょう。

5 扱う話題について考えよう

高等学校ではどの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱うことになっています。高等学校学習指導要領解説外国語編英語編で詳細に見てみましょう。

高等学校ではどの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱う。(中略)生徒の発達の段階や習熟の状況などに応じて、高校生にとって興味・関心のある話題を取り上げながら、徐々に、時事的な話題や学術的な話題で、より抽象度が高い内容や詳細で具体的な情報などを扱っていくことが考えられる。

生徒が主体的、自律的にコミュニケーションを図る授業を展開する上で忘れてならないのは、伝え合う内容そのものに目を向けることです。生徒の知的好奇心を刺激する教材を利用したタスクに取り組んだり、課題を解決するために対話を通じてメンバーの価値観の相違点を確認したりする中で、生徒は言葉として英語を扱うようになります。相手の発話内容が分かっているような紋切り型のやり取りでは、たとえ活発にコミュニケーションをしているように見えたとしても、授業で求められるコミュニケーションとしては不十分であるということです。教材研究では教材のテーマの背景知識を調べ、内容について理解を深めるとともに、教材の内容と生徒との関わりを捉えることが必要です。創意工夫を心がけ、生徒から『知りたい』『伝えたい』『解決したい』といった心の声を引き出せるような授業の導入や言語活動を創出したいものです。

実践編

1 継続的な帯活動を取り入れよう！

今回の学習指導要領改訂は、発信力強化を図る科目として「論理・表現」を設定したり、「話すこと」の領域が細分化され「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」の二つに整理されたりするなど、英語での発信力強化に焦点を置いたものとなっています。特に、やり取りの重要性については、高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、CEFRからの引用を基に次のように説明しています。

「話すこと」のやり取り (interaction) では、少なくとも2人以上の個人が言葉のやり取りをし、その際、産出的活動と受容的活動が交互に行われ、口頭のコミュニケーションの場合は同時に行われることもある。対話者が同時に話し、聞くだけではなく、聞き手は話し手の話を先回りして予測し、その間に答えを準備するなど、やり取りは言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められることから、コミュニケーションにおける中枢的役割を果たしているとされている。

(下線部は筆者による)

ここでは、すぐに実践できる言語活動を紹介します。

(1) Small Talk

ここでの Small Talk とは、即興で与えられた話題について教師の質問を活用しながら会話を継続させる活動です。以下のような与えられたトピックと質問についてペアを変えて同じトピックについて会話をします。パワーポイントを使用すれば、毎回板書する手間がなくなり、より便利になります。また、表示内容を徐々に減らし、3回目には見ないで会話ができるように促していくと緊張感をもって行うことができます。

Food <ul style="list-style-type: none"> • What food do you like? • When do you want to eat it? • What food do you dislike? Why? 	Subject <ul style="list-style-type: none"> • What subject do you like? • Why do you like it? • How often do you study it?
Animal <ul style="list-style-type: none"> • What animal do you like? • Where do you see the animal? • What animal do you want to have? 	Subject <ul style="list-style-type: none"> • What subject do you like? • How often do you do it? • Why do you like it?

また、以下に三つのヒントを紹介します。

- ① 立って活動を行う (ジェスチャーやアイコンタクトが活発になる)
- ② 目標時間を決める (達成感や緊張感を高める)
- ③ 教師は生徒の会話に耳を傾け、気付いたことを全体に共有する (生徒の発話の質と量を高める)

POINT コミュニケーション・ストラテジーを導入する

上述したように、コミュニケーションとは、表現すること、理解すること、そして伝え合うことです。こういったコミュニケーションを円滑にするための表現が高等学校学習指導要領には取り上げられています。

コミュニケーションを円滑にする		
・ 相づちを打つ	・ 聞き直す	・ 繰り返す
・ 言い換える	・ 話題を発展させる	・ 話題を変える など

これらの表現はコミュニケーション・ストラテジーと呼ばれています。コミュニケーション・ストラテジーには「聞き直す」「繰り返す」「言い換える」「話題を発展させる」などがあります。ここでは、基本的な Rejoinders (相づち) や Shadowing (オウム返し), Follow-up questions (追従する質問) を以下の表にまとめ、紹介します。

Rejoinders	Oh, I see / Really? / Great! / Wow!	
Shadowing	例1 A: Have you ever been to Tokyo?	B: <u>Tokyo</u> ? Yes.
	例2 A: I watched a soccer game yesterday.	B: Oh, <u>a soccer game</u> ! Nice.
Follow-up Questions	A: I like watching sports.	B: <u>What sport</u> ?
	A: Basketball.	B: <u>Who is your favorite basketball player</u> ?
	A: I like John Smith the best. He is	

これらのコミュニケーション・ストラテジーを聞き手が使用することで、話している生徒は「聞いてくれている」という安心感を得ることができます。英語を話すことに不安感がある生徒に効果的です。授業でコミュニケーション・ストラテジーを導入する際には、生徒が無意識に使うようになるまで練習する必要があります。そのため、生徒の状況を確認しながら、少しずつコミュニケーション・ストラテジーを導入することが大切です。Rejoinders や Shadowing が自然とできていない状態で Follow-up questions を導入すると、会話が盛り上がりず、続かないことが考えられます。高等学校学習指導要領解説外国語編英語編の中でも、聞き手と話し手への配慮について書かれています。

例えば、コミュニケーションの目的に応じて聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度を示しているかなど、相手への配慮が求められることになる。

(2) Mind Map

Mind Map では、与えられた話題についてアイデアを自分で出したり、クラスで出し合ったりしながら、自分とクラスメイトとの情報を共有し、最終的にはライティング活動に結び付ける活動です。

- ① 与えられたトピックについて自分で書ける限り、キーワードを書く。
- ② 三つの質問に答え、自分のアイデアを文章にする前に生徒同士で話し合う。
- ③ 周りの意見や表現を参考にして、与えられた時間書き続ける。

生徒は、与えられた質問を参考にしたり、周りの意見を参考にしたりして、多くの支援を活用しながら、ライティング活動に取り組むことができます。

Topic	① Food																																												
Mind Map																																													
Q1	What food do you like the best? I like ○○○ the best.																																												
Q2	When do you want to eat it? I want to eat it for (breakfast / lunch / dinner)																																												
Q3	What food do you dislike? (dislike 嫌い) I don't like ○○○.																																												
	<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>20</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>40</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>60</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>											20											40											60											
										20																																			
										40																																			
										60																																			

(3) Free Writing

Free writing では、教師が複数のトピックを生徒に提示し、生徒が自分でトピックを選び、決められた時間（例えば5分間）書き続ける活動です。この活動の目的は、たくさん書くことにあるので、文法やスペリングの間違ひは過度に気にしないように指導するとよいでしょう。また、「書くこと」から話すことへ結びつけることも可能です。書いた内容について“What did you write about?” とペアで尋ねることで、「書くこと」と「話すこと」との技能の統合ができます。

POINT 辞書やインターネットに頼りすぎない

生徒が書いたり話したりする際に、辞書やインターネットで調べた語彙や表現を用いることがあると思います。しかし、このような場合、結果として、よく知らない語彙や表現を用いたために、自分はもちろん、読み手や聞き手も理解できなくなってしまうことがあります。辞書やインターネットで調べることも必要ですが、使い方には注意が必要です。また、書いたり、話したりする際に用いる単語のレベルについて高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では次のように述べています。

生徒の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙（受容語彙）と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙（発信語彙）とがあり、ここで示されている「400～600 語程度」の全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではないことにも留意する必要がある。特に高等学校においては、中学校までに学習した 2,500 語程度をできるだけ発信語彙として用いる機会を豊富に提供することが重要である。

（下線部は筆者による）

英作文の場合、授業では辞書やインターネットの使用を制限して、発信語彙を活用させることができますが、家庭学習等でライティングの課題を出した場合には、使用する語彙を十分に管理することはできません。したがって、書いたことを基に発表をさせたり、その後に質疑応答や意見交換をさせたりすることで、目的・場面・状況に応じた語彙について生徒に考えさせることも必要です。

(4) Picture Describing

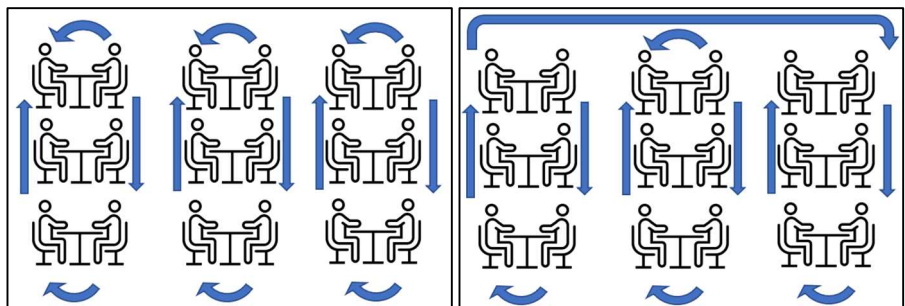
Picture Describing とは、教師がイラストや写真を掲示し、生徒がその絵について話し合うという活動です。ここでは、絵の状況を説明することと、絵について思うことの見聞交換をします。また、同じ質問であっても、絵だけ変えれば場面や状況を変えることができるので、フリー素材をダウンロードして使用することがおすすめです。

1. What do you see?
2. What is he/her doing? (What are they doing?)
→Why?
3. What do you think of this picture?
→Why?



POINT ペアを変える方法とその役割

ペアを変える方法にいくつかのバリエーションがあると生徒は飽きずに活動に参加できます。また、英語が得意な生徒同士や英語が苦手な生徒同士がペアを組むこともあれば、英語が得意な生徒と苦手な生徒がペアを組むこともあ



ります。そういう中で、ペアワークがうまくいくペアもあればうまくいかないペアもあります。そのためにも、1時間の中でペアを変えることで、最初はうまくいなくても、別のペアでも活動することができるのであれば、次は成功させようと思う気持ちが湧いてきます。

高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、即興で話して伝え合う活動について次のように説明しています。

即興で話す力は、一度の授業や言語活動で身につくものではない。様々な機会をとらえて即興で話す活動を継続的に行っていくことが大切である。

このようなことから、ペアを変えながら、繰り返し言語活動を行い、コミュニケーションを図る資質・能力を身に付けさせていくことが大切です。

2 教科書を読んだ後の活動を取り入れよう！

「英語コミュニケーションⅠ」を例に挙げると、思考力、判断力、表現力等を育成するために、英語を聞いたり読んだりした後は、その内容を話したり書いたりしたことを伝え合うことが示されています。

ア 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に捉えたり、自分自身の考えをまとめたりすること。

イ 日常的な話題や社会的な話題について、英語を読んだり聞いたりして得られた情報や考えなどを活用しながら、話したり書いたりして情報や自分自身の考えなどを適切に表現すること。

ウ 日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして、要点や意図などを明確にししながら、情報や自分自身の考えなどを伝え合うこと。

この活動を授業では以下のような流れで実践していきます。

- ① 教科書を読む（内容理解を促すために True or False や Q & A を活用する）
- ② 読んだ内容を図式化する（Mind Map や表、ベン図、比較表など）
- ③ 口頭や筆記で自分の言葉を使って再生する

単語や文法を学習するためには音読させることも必要ですが、音読が授業の目的とならないように配慮しなければいけません。また、生徒同士でやり取りをさせる場合は、生徒が話しやすいように以下の英語を出だしとして話し合うと生徒もスムーズに話し合いが始められます。

Do you think ...?	What do you think of ...?
Do you want to ...?	Would you ...?
What ... would you like to ...?	What ... do you want to ...?
What ... do you recommend to ...?	How do you ...?
Do you ...? Why?	Why do you think ...?
Which do you like better, A or B?	What do you think is important when ...?
If you were ..., what would you ...?	Do you agree or disagree? Why?

帯活動を通して即興で話し合うことができるようになってくると、教科書本文についての話し合いも盛んに行われるようになります。日々の積み重ねが大切な英語学習では、コミュニケーションの場を授業でたくさん提供する必要があります。

3 おわりに

「言うは易く行うは難し」ということわざが示すとおり、これら全てに気を配って授業づくりや授業運営を行うというのは直ちにできることではありません。また、いつも、計画したとおりに授業が進むわけではありません。日頃から授業中の生徒の反応をよく観察したり、発話に耳を澄ましたりして、徐々に改善していくことが大切です。生徒は、時に、予想以上の活動をすることもあります。そのような成長を見られるのも教職の醍醐味です。

授業の一部だけでも改善してみるなど、できそうなことから少しずつ諦めずに取り組んでいくことが授業改善の秘訣だと思います。